

今回は、12月12、13日に行われました第8回日本運動器疼痛学会について九州大学の坂本英治先生に、報告させていただきます。

第8回日本運動器疼痛学会参加報告

九州大学大学院歯学研究院口腔顔面病態学講座歯科麻酔学分野 坂本英治

第8回日本運動器疼痛学会が平成27年12月12、13日の2日間に渡り、名古屋国際会議場（名古屋市）において開催された。松原貴子会長（日本福祉大学健康科学部）の会長講演に始まり、特別講演にIowa UniversityのKathleen A. Sluka先生がDoes exercise increase or decrease pain? Underlying mechanisms and clinical implicationsのタイトルで運動療法の慢性痛に対する効果についての講演をなされたのをはじめ、多くの口演、ポスター発表があった。

筆者は大会第2日目のシンポジウム2「生物心理社会モデルに基づいた痛みに対する科学的アプローチ」にシンポジストとして参加した。本シンポジウムはペインコンソーシアムシンポジウムとして企画された。ペインコンソーシアムは日本疼痛学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、日本運動器疼痛学会、日本腰痛学会、日本口腔顔面痛学会、日本ペインリハビリテーション学会が痛みに関する課題の共有と方策について協議することを目的として設立された学際的連携組織である。このテーマのもと、

「痛み患者の虚偽回答傾向」

(日本運動器疼痛学会 笠井裕一先生：三重大学大学院脊椎外科・医用工学講座)

「陽性情動・陰性情動と痛み---脳報酬系の役割」

(日本疼痛学会 仙波恵美子先生：行岡医療大学医療学部理学療法学科)

「歯科における慢性痛～口腔顔面痛の心理社会的背景～」

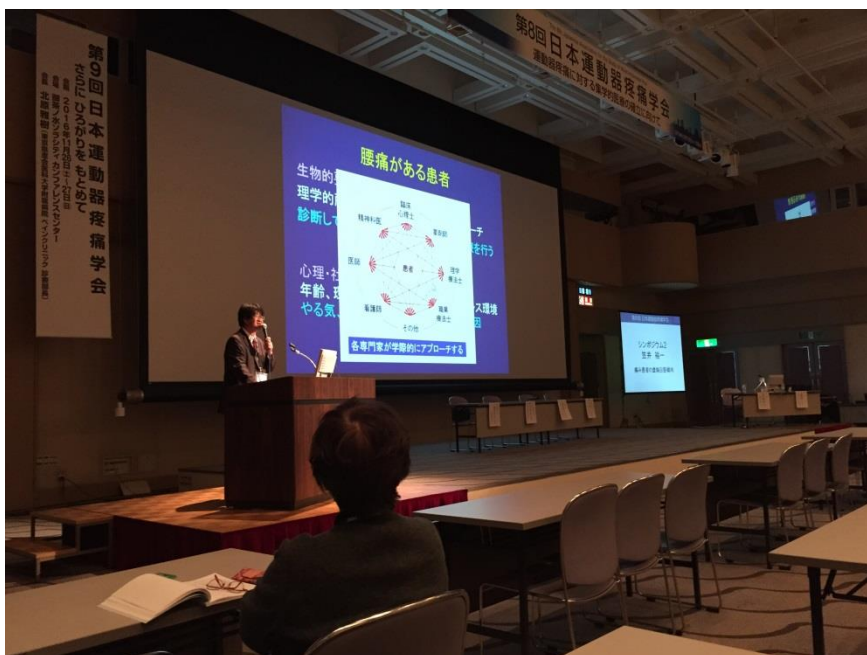
(日本口腔顔面痛学会 筆者)

「慢性腰痛に対するリエゾンアプローチ」

(日本腰痛学会 二階堂琢也先生：福島県立医科大学医学部整形外科学講座)

の4名がそれぞれのテーマで発表した。

笠井先生はモーズレイ性格検査を用いて、元来その回答の信憑性を評価するライスコアを慢性痛患者に当てはめて検討された。虚偽回答には報酬に働くものとそうでないものがあり、痛み患者を深く掘り下げる重要な側面であることを示唆された。仙波先生はそれまでの自身や共同研究者との膨大な研究結果から、ストレス-うつ-慢性痛の関連と、運動や楽しいこと、笑いが創り出す報酬系について解説された。膨大なデータからのご発表は圧巻だった。続いて筆者は神経障害性疼痛について発表した。抜歯、インプラント、口腔外科手術で生じる三叉神経の神経障害性疼痛はしばしば医院間とのトラブルにまで発展する。自験例をクラスター分析から患者群をクラスタリングして、特に訴訟などトラブルになっている患者が多く属する群をそれ以外の群とで比較した。最後に二階堂先生は自身の所属する福島県立医科大学医学部整形外科の腰痛患者のリエゾン療法について発表された。いずれの発表も内容の深いテーマで、時間一杯まで質疑応答、ディスカッションが繰り返された。



シンポジウム 笠井先生のご発表

日本運動器疼痛学会は様々な職種のスタッフとの連携を推進し、参加者も二日でのべ1600人を越えた。急成長の理由はこのようにいろんな職種の先生たちと連携することで各診療科や領域でそれぞれに発展してきた疼痛の研究・臨床成果を融合し、集学的診療システムを確立することを目標としていることであろう。紙面の都合上全ては紹介できないが多くの興味深い発表、セッションに参加してとても収穫の多い学会であった。

口腔顔面痛と運動器疼痛学会の扱う腰下肢痛とは接点は少ないようにも思える。しかし、臨床基礎ともに研究内容や研究デザインには参考になることも多く、また作業療法や臨床心理の分野との関わりは口腔顔面痛にも必要となるものではないかと感じた。なにより痛み診療をいろんな角度から連携していくあり方は我々の今後あるべき姿のひとつなのかもしれない。そんなことを感じながら会場をあとにした。



懇親会の様子 世界の山ちゃん、みそかつ、
天むす、きしめんのブースあり。名古屋めしづくしの懇親会